訓読の世界

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中学校で学習した漢詩・漢文で印象に残ったものをあげる。
知技(1)ア・(2)ア・エ、思判表B(1)オ

❶・生徒は（小）中学校ですでに故事成語・唐詩・『論語』を学習している。ただし変則的な書き下しや現代語訳（鑑賞文）で学んでいる場合も多く、断片的な語句の形であげる者も多いだろう。
・中学時代の漢文学習を振り返ることを目的とし、できるだけ生徒どうしで相談させてみるとよい。
・P一一六「なぜ漢文を学ぶのか」を読み、生徒の知識や関心の程度、漢文学習のとらえ方を把握し、以後の指導計画の参考にするとよい。

【評価】・言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・我が国の文化と中国の文化との関係について理解しているか、確認する。
・（小）中学校での学習を振り返ったり、P一一六「なぜ漢文を学ぶのか」を読んだりして、時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、発言や行動を観察する。
・我が国の言語文化について理解しているか、発言や行動を観察する。

■展開

学習活動のポイント

❶ 基本構造「主語＋述語」「修飾語＋被修飾語」と送り仮名・句読点・書き下し文について理解する。

❷ 返り点の付け方と、返り点が誕生した理由を理解し、返読の必要性について考える。知技(2)ア

❸ P一一七～一一九の「送り仮名・句読点」「返り点」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。

❹ P一二一「学習のポイント」1を行う。知技(2)ウ

〔学習のポイント」1〕

❶・P一一七の例文を用いて、「主語＋述語」「修飾語＋被修飾語」の文構造は、漢文と日本語とで語順が変わらないことを理解させる。

・P一一六下段「ポイント❶」を活用し、訓読・白文・訓点・書き下し文について確認する。

・送り仮名は、限られたスペースの中で明確に読み取れるよう、片仮名で、漢字の右下に小さく施すことを確認する。

・漢文では主格を表す助詞「ガ」は送らないことを確認する。

《板書例》

訓読文

主語　述語
鳥　語ル。
＋
花　香ル。
←
鳥　語リ、花　香ル。

書き下し文

主語　述語（動詞）
鳥　語る。×鳥が語る。
＋
花　香る。×花が香る。
←
鳥　語り、花　香る。

◆×「鳥が語り、花が香る。」
→主格を表す「が」は用いない。
○「鳥は語り、花は香る。」
→強調を表す「は」は用いられる。

◆訓読
＝白文に送り仮名・句読点・返り点を付ける。

書き下し文
＝訓読した漢文を日本語の語順に書き表したもの。

《板書例》

主語　述語
天　朗。

＋

主語　述語（形容動詞）
天　朗らかなり。

主語　述語
気　清。

←

主語　述語（形容詞）
気　清し。

天朗、気清。

天朗らかに、気清し。

《板書例》

修飾語　被修飾語
大〉　器。

＋

修飾語　被修飾語
晩〉　成。

←

主語　述語
大器ハ　晩成ス。

（大なる器は　晩く成る。）

◆二字熟語はそのまま音読みで読む場合が多い。

修飾語　被修飾語
大なる〉　器。

＋

修飾語　被修飾語
晩く〉　成る。

←

主語　述語
大器は　晩成す。

❷・Ｐ一一七下段「ポイント❷」を活用し、「登山」「読書」は「山に登る」「書を読む」という日本語の文構造とは異なり、「述語―目的語（補語）」となることを確認する。

・漢文と日本語の文構造が異なる場合に、日本語の語順で読む方法として、「返り点」が施されたことを理解させる。

・漢字と日本語との関係について常に自覚させる。

【評価】返り点の学習を通して、我が国の文化と中国の文化との関係について理解しているか、確認する。

《板書例》

「漢文と日本語の語順」

語順が同じ構造

1主語＋述語
日没（日が沈む。）

2修飾語＋被修飾語
美食（おいしい食べ物。）
予定（あらかじめ定める。）

語順が異なる構造

1述語＋目的語
読書（本を読む。）

2述語＋補語
登山（山に登る。）

↓語順を入れ替えて訓読するために

「返り点」が生まれた

◆「ヲ」を送った語を**目的語**、
「ニ・ト・ヨリ」を送った語を**補語**と呼ぶことが多い。

述語	目的語	述語	補語
転ジテ	禍ヲ	為ス	福ト。

❸原文の下にある書き下し文を参照させ、範読、斉読、指名読みなどを場合に応じて使い分け、繰り返し音読させる。

❹返り点の施された文字があったら必ず下の文字から上の文字へと返ること、返り点の施されていない文字は上から一つ残らず読んでいくこと（ただし置き字は例外）などが基本である。

「学習のポイント」1のような、文字でなく□からなる文を読むとき、こういう原則が極立って意識されるはずである。

【評価】「学習のポイント」1を行い、訓読のきまりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ P一二〇～一二二の「置き字」「再読文字」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。

❷ 本文を書き下し文に改める練習をする。

❸ 白文をノートに写し、返り点と送り仮名を付ける練習をする。

❹ 置き字の意味や役割、再読文字の返り点・送り仮名の付け方の決まりについて理解する。知技(2)エ

❺ 教材を現代語訳し、それぞれどのような意味を含んでいるのか考える。思判表B(1)ア

❻ P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二三「学習のポイント」1・2を行う。知技(1)ウ・(2)ウ

〔P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二三「学習のポイント」1・2〕

❶指導者の範読に合わせて原文を目で追い音読し、返り点の必要性を理解する。

❷ここでつまずくようであれば、また訓読の規則の確認、音読練習に戻る。書き下し文をつくる場合に留意する点については、P一二三「書き下し文のまとめ」を参照する。

❸白文を写すことはそれだけで文構造を考える訓練になるので、機会をみて実施したい。ただし無理があるようならあらかじめプリントする。訓点を付ける場合には、先に返り点だけをつけたりはせず、読む順番のとおりに「訓点」（送り仮名と返り点）を付けることが大切である。

❹漢文訓読上、返り点の一般的な原則から外れるケースが二つある。それがこの置き字と再読文字である。再読文字の学習にあたっては、再読という現象が起こる理由を理解することが第一である。「将来」と「未来」の対比などからも再読文字のニュアンスをつかむヒントが得られるかもしれない。

【評価】現代の言葉にもある「将来」「未来」などと漢文のつながりについて理解しているか、発言や行動などにより確認する。

❺辞書で確かめる前に、漢字そのものが持つ意味についてこれまでの言語経験を元に考えることが大切。漢和辞典の引き方・見方については、P一二四「漢和辞典の使い方」を参照するとよい。

【評価】教材の格言の内容を的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❻返り点に従って語順を追い、置き字は書かずに、助詞・助動詞は平仮名にするという決まりが身についていれば、「学習のポイント」2・3はできる。四字熟語の訓読は、文の構造を見分けることが大切である。「主語＋述語」、「修飾語＋被修飾語」、「述語＋目的語（補語）」、「否定詞が上にくる形」などを見抜くことである。返り点を付けてヒントにしてもよい。訓読できた段階で意味が言えるようになれば相当分かってきたということである。

【評価】・「言葉と表現」を行い、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ノートや提出物などにより確認する。
・「学習のポイント」を行い、訓読のきまりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

▼送り仮名・句読点・返り点　これらについては教科書にある説明で十分かと思われるが、少し補足しておくと、まず、上下点でも間に合わずさらに返らなければならないときは、甲乙点（甲・乙・丙…）、それでも間に合わないときは天地点（天・地・人）を用いる。ただし、これらはめったに使われない。また一二点や上下点などの最初の点に限られる。

送り仮名について、どこから送るかは、現代の標準表記に従い、原則として活用語尾から送り、誤読のおそれのある場合は、多めに送っておけばよい。

訓読と現代語訳

鳥語り、花香る。

鳥は美しい声でさえずり、花は芳しい匂いで香る。

【出典】　南宋・呂本中「庵居」

「鳥語り、花香る」

（「語り」）にする。また、さらに連なりを強くするなら「語りて」と読んでもよい。主語に「は」を付けて「鳥は語り（て）、花は香る」と読めば「鳥語」と「花香」の対が強調される。

2　漢字の読みは「鳥・語・花・香」と一字ずつのまとまりなので、一字の文字は訓で、二字の熟語は音で読む、という原則どおり訓読みで「とり・かた（り）・はな・かを（る）」と読む。

3　美しい春の風景を表現する描写としてしばしば用いられる。時に「花香鳥語」と順序を逆にして使われることもある。

指導上の注意点

1　「主語（鳥）＋述語（語）、主語（花）＋述語（香）」の構造。「主語＋述語」の語順は漢文も日本語も同じであるから返り点は不要。送り仮名だけ付けてある。「鳥語」は後の「花香」に連なっているので「語」を終止形（「語る」）にしないで連用形

訓読と現代語訳

天朗らかに、気清し。

空は晴れ渡り、空気は澄んでいる。

【出典】　王羲之「蘭亭集序」

「是日也　天朗、気清、恵風和暢。」

指導上の注意点

1　前の「鳥語、花香」と同じく「主語＋述語」を繰り返した構

造。ただし述語部分が、「鳥語、花香」では動詞であるのに対して、この「天朗、気清」では形容動詞（朗）と形容詞（清）になっている。「鳥語、花香」のときと同じく、「天朗らかにして、気清し」や「天は朗らかに（して）、気は清し」と読むことも可能。

2　この四字句も一字ずつに区切って読むので、原則に従えば全て訓読みとなるところだが、「天」は「あめ」や「あま」などという訓は使わず「てん」と音読みする。「気」には訓はないので、これも一字だが「き」と音読みする。

3　晩春の晴れ渡った江南の空を描いた字句。王羲之は晩春、会稽（紹興）の蘭亭で同好の士と曲水の宴を開く。これはその時一同が作った詩につけられた序文中の言葉。

訓読と現代語訳

大器は晩成す。

大きな器は、出来上がるまでに時間がかかる（大人物は晩年になって大成するものだ）。

【出典】「老子」四十一章
「大器晩成、大音希レ声、大象無レ形。」

指導上の注意点

1　「主語」（大器）＋「述語」（晩成）の形になっている点では前の例文と同じだが、そのそれぞれについて「修飾語＋被修飾語」の構造「大（なる）＋器」／「晩（に）＋成（る）」になっている点を指摘したい。語順は日本語と同じ。

2　「晩成す」は、漢語（熟語）にサ変動詞「す」の付いた例。漢文ではきわめて例が多い。

3　漢文訓読で、音訓の読み分けをどのようにするのかもなかなか難かしい問題で、生徒の戸惑う点である。絶対的な規則のようなものはないが、読んで意味の通る自然な日本語であるように心がけることが第一である。ただし一応の目安として、一字の文字は訓（例：君〈きみ〉）で、二字の熟語は音（例：君子〈くんし〉）で、ということはいえる。「大器晩成」は、これらの原則に従って読める例である。

4　「大器」は偉大な人物の比喩。偉大な人物は晩年になって大成するものである、との意。単に「大器晩成」ともいう。

訓読と現代語訳

禍を転じて福と為す。

災難にうまく対処して、それを幸福に変えてしまう。

【出典】「戦国策」燕巻第九
「斉人紫、敗素也。而賈十倍。越王勾践棲二於会稽一而後残レ呉覇二天下一。此皆転レ禍而為レ福、因レ敗而為レ功者也。」

指導上の注意点

1　この文は日本語の語順と異なり、「述語＋目的語・補語」の形で、一字返るレ点を用いる例。レ点は形が列をなして飛ぶ雁に似ていることから、古く雁点ともいう。

2　返読する場合、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの送り仮名が振られることが多い。

3　「失敗を転じて成功と為す」という意。この言葉は「禍福は糾纆のごとし」（禍福はあざなえる縄のようなもので、どうなるか分からない）という成語を生み、人の世の運不運の変転極まりないことをいうときにしばしば使われる。

訓読と現代語訳

少年老い易く学成り難し。

若い人はすぐに年を取り、学問が成就するのは難しい。

【出典】「偶成」
少年易レ老学難レ成　一寸光陰不レ可レ軽
未レ覚池塘春草夢　階前梧葉已秋声

指導上の注意点

1　この文は返読文字「易・難」を含んでおり、「易老」「難成」を日本語の語順で読むために返り点を用いている。返読文字という文字があるわけではなく、動詞以外でいつも返り点のつく文字をまとめて返読文字と名付けたに過ぎないことに留意させたい。

2　返読文字で返る場合は、動詞の場合と異なり、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの送り仮名は振られないことに注意させたい。

3　「若い時代はあっというまに過ぎ去るため、学問が成就するのは難しい」という意。「一寸の光陰、軽んずべからず。」と対で用いられ、時間の大切さを伝えるのに引用されることが多い。

訓読と現代語訳

人学ばざれば、道を知らず。

人は学ばなければ、道を得ることができない。

【出典】「礼記」学記
「玉不レ琢、不レ成レ器。人不レ学、不レ知レ道。是故古之王者、建レ国君レ民、教学為レ先。」

次は「不」に返り点があるので下にゆく。「知」にも返り点があるのでさらに下にゆき「道」を読む。「道」には返り点がないため上に戻って「知」を読み、さらに「不」に戻って読む。

また、本文には否定語「不」があるが、「不」は返読文字（動詞以外で返り点の付く文字）である。「ヲ・ニ・ト・ヨリ」を付けずに返ることに注意させる。

指導上の注意点

1　主語の後に否定語を伴った条件文がくる構造。レ点を重ねてあるので生徒は複雑なように考えるが、読む順序の考え方は前の二つと変わらない。教え方としては、返り点は原則として右上の字に効いていると教えると指導しやすい。

本文の読み方は、「人」を読み、「不」を読もうとしたら返り点が効いている。それでいったん下へゆき、「学」に返り点がないことを確認して「学」を読み、上に戻って「不」を読む。

2　一字ずつの区切りなので原則として全て訓読みする。

3　人は学ぶことによって初めて物事の道理を心得、才能を発揮できるようになることをいう。本例文の後に続く「昔の聖王は国を建て、民に君臨するにあたっては、まずなんといっても学問と教育を大事にした」という記述もうなづける。学問の目的や教育の方法を説く「礼記」学記篇の言葉である。

訓読と現代語訳

羊頭を懸けて、狗肉を売る。

（肉屋が）看板として羊の頭を掲げておいて、実際には犬の肉を売る。

【出典】「無門関」六則
「懸二羊頭一、売二狗肉一。」

指導上の注意点

1　一二点を用いた例文。一二点は二字以上上に返る場合に用い、連続して上に返る場合には「…↑三↑二↑一」と用いることも

できる。この例文は単文を二つ重ねた形なので、「〇二〇一、〇二〇一」となり、「〇二〇一、〇二〇二」とはならないことを理解させたい。（「二→三」は上へ返っていない。）「懸」は二点が効いているのでいったん下へゆき、「羊頭」を読んでから読む。次も「売」は二点が効いているのでいったん下へゆき、「狗肉」を読んでから読む。

2　この成句には類句がたくさんある。最も古いものとしては「晏子春秋」内篇雑下の「懸二牛首于門一、而売二馬肉於内一也」があり、「牛首馬肉」のように四字熟語としても用いる。

「羊・牛」の肉（美味なもの）、「狗・馬」の肉（それに劣るもの）をどのように捉えた成語かを発問してもよい。

3　見せかけだけ立派で内容が伴わないことの例え。肉を売るときには、こうしたことが実際に多く見られたのであろう。庶民にもよく分かる生活に根ざした例えである。

訓読と現代語訳

百聞は一見に如かず。

他人から百回聞くことは、実際に自分の目で一度見ることに及ばない。

【出典】「漢書」趙充国伝
「百聞不レ如二一見一。兵難二険度一。臣願馳至二金城一、図上方略。」

指導上の注意点

1　レ点と一二点の両方を用いる例。返り点は「不レ如一見」の形にはならないことに注意させる。

2　「不レ如レA」は「Aニシカズ」と読み、「Aに及ばない（Aのほうが程度が甚だしい）」の意。比較を表す。「如」は、もと「同等である」の意。「不レ如」は、「同等でない→及ばない」の意になる。

3　自分で体験することこそが重要である、との例え。活字に頼ったり、人の話を鵜呑みにする人に対する戒めとしてよく使われる。

訓読と現代語訳

吾日に吾が身を三省す。

私は一日に何度もわが身について反省をする。

【出典】「論語」学而

「曽子曰、吾日三省吾身。為レ人謀而不レ忠乎、与二朋友一交而不レ信乎、伝不レ習乎。」

指導上の注意点

1　二字の熟語に返って読む例。現在では二字の間に「ー」（ハイフン・竪点などという）の符号を付けるが、これは分かりやすさのためにすることで一般書では必須の点ではなく、昔は付けない場合もあった。ただし、高校での学習や大学入試では必ず付ける。三字の熟語の場合は、「□二□一□」のように付ける。

2　「三たび吾が身を省みる」とも読むが、ここでの「三」は具体的数字というより「何度も」の意にとるべきであり、その意を生かすためここでは「さんせいス」と読んだ。

訓読と現代語訳

君子は其の言の其の行ひに過ぐるを恥づ。

君子は自分の言葉が実践を上回ってしまうのを恥じる。

【出典】「論語」憲問

「君子恥二其言之過一其行一」

指導上の注意点

1　大枠が「主語（君子）＋述語（恥）＋目的語（其言之過其行）」の構造になっていることに気づかせることが大切である。そしてその「目的語」は、「主語（其言）＋述語（過）＋補語（其行）」になっているので、いったん「行」から「過」に返り、そして「恥」に返る。つまり「三↑二↑一」と戻ることになる。「之」が主語と述語の間に置かれると、文全体が名詞句として扱われる。

2　「言」の背後に「発言」を想定できるように、「行」の背後にも「行動」という熟語を想定できる。「言」だけでなく「行」も「こう」と音で読むことが可能。

3　実践を伴わない言葉は吐くべきでない、という言葉。「巧言令色鮮し仁」や「剛毅木訥仁に近し」という言葉と相通ずる「論語」の言葉である。

訓読と現代語訳

君子は言を以て人を挙げず。人を以て言を廃せず。

優れた為政者は、立派なことを言う人がいてもその言葉だけで登用したりしない。その人が立派でないからといってその人の言葉まで切り捨てることはない。

【出典】「論語」衛霊公
「子曰、君子不レ以レ言挙レ人。不レ以レ人廃レ言。」

指導上の注意点

1　レ点の例。「まずレ点に従って一字上に返り、次に一二点に従って読む」ということは、送り仮名も含め次のような順番で読むということである。
①君　②子　⑦不レ　④以レ　③言　⑥挙レ　⑤人。

生徒に返り点・送り仮名を付ける練習を課す場合には、このように返り点の種々のパターンに注意させる必要がある。

2　「君子」は、ここでの意味のほか、学徳ある立派な人の意にも用いる。対義語は「小人」。「以」は、原因・理由・方法・手段等を表すのに広く用いる語。

3　君子は、人物とその人の言う言葉の内容の双方を見て人を判断する、ということ。情にほだされずに人を判断することは、なかなか難しい。

訓読と現代語訳

人の悪を称する者を悪む。

他人の悪い点を言い立てる者を憎む。

【出典】「論語」陽貨
「子貢曰、君子亦有レ悪乎。子曰、有レ悪。悪レ称レ人之悪一者上。」

指導上の注意点

1　一二点を挟んで、上下点でもう一度返って読む例。一二点と上下点とが錯綜する（「下…二…上…一」）ことはなく、必ず「下…二…一（…中）…上」のように「二」を「上（中）下」が大きく包みこむ形になる。

2　「之」は日本語の助詞（連体修飾）に当たるので平仮名書きする。「悪」は、「わるい」の意のときの音は「アク」、「にくむ」意のときの音は「オ」。「称」は、わざと言い立てる意。

3　人の欠点をあれこれ言うな、という言辞は「論語」の各所に見られる。

訓読と現代語訳

児孫の為に美田を買はず。

子孫によく肥えた田畑を買い残したりしない。

【出典】 西郷隆盛「偶成」

「幾歴辛酸志始堅、丈夫玉砕恥甎全、一家遺事人知否、不下為二児孫一買中美田上。」

指導上の注意点

1　上中下点を用いた例。「一二点」を挟んで下から二か所に返る形。もし、さらにもう一か所上に返ることになれば「上下点」では間に合わないので、「甲乙点」を使う。

2　「子孫」ではなく、「児孫」になっていることに注意。

3　作者西郷隆盛は、明治維新の功臣。辛苦に耐えることこそが人を鍛えるのであり、そのため子孫に財産を残したりせず、あえて苦労させるのだということを述べている。

▼置き字　漢語の主な分類に①実字（名詞）・虚字（動詞や形容詞・形容動詞）・助字（それ以外のもの）の三分類と②実字（名詞・動詞・形容詞・形容動詞）・虚字（それ以外のもの）の二分類とがある。高校の学習では①の助字や②の虚字に当たるものを「助字」（助辞）と呼んでいる。漢文読解にはこの「助字」の知識が欠かせない。江戸期の名だたる漢学者も「助字」についての著述には精魂を傾けているが、それは「助字」の理解が漢文の読解力を左右するほど重要であったからである。

さらに細かに見てみると「助字」の中でも訓読するときには読まない字がある。それを「置き字」という。中国語で読むときにはきちんと読むので一定の意味を持つことは言うまでもない。「置き字」はその前後の送り仮名に反映されたり、訓読の読みになじまなかったりするために読まれないだけであって、決して軽視すべきものではない。置き字は次のように分類される。

①前置詞的に用いられるもの　　於・于・乎
②接続詞的に用いられるもの　　而
③文末に用いられるもの　　矣・焉・兮（・也）

ただし、右にあげたのは用法の概略で、これらの語も場合によっては接続詞や疑問詞として読む場合がある。

訓読と現代語訳

良薬は口に苦し。

病気によく効く薬は口に苦く感じるものである。

【出典】「孔子家語」六本
「孔子曰、良薬苦二於口一而利二於病一。忠言逆二於耳一而利二於行一。」

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「(…に) 於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに置かれる語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れ、動作の行われる場所や時間、動作の起点や対象、比較などさまざまな関係を表すが、基本的には、「…について」「〜の上で」「＝という場で」という語感の言葉である。「于」や「乎」も「於」とほぼ同じように用いられる。

2　この文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「口」の送り仮名（…に）に表れており、「動作の対象」を表す。「於」を英語の「to」と考えると意味を取りやすい。

3　自分に対する忠告は聞き入れにくいものだが、ためになるものだ、ということを例えたもの。

訓読と現代語訳

青は之を藍より取る。

青の染料は藍の草から取り出す。

【出典】「荀子」勧学
君子曰、「学不レ可二以已一。」青取二之於藍一、而青二於藍一、冰水為レ之、而寒二於水一。

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「(…に) 於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに来る単語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れることをしっかりと教えたい。

2　この文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「藍」

の送り仮名（…より）に表れており、「動作の起点」を表す。

「於」を英語の「from」と考えると意味を取りやすい。

3　文字通り解釈すれば、青という染料は、藍という草から抽出する、という意味である。これに続く「藍よりも青し」とともに、「弟子が師よりも優れたものとなる」という意味で用いられ、「出藍の誉れ」という成語にもなっている。

訓読と現代語訳

朋友に信ぜられず。

友人に信用されない。

【出典】「中庸」

在レ下位一不レ獲二乎上一、民不レ可二得而治一矣。獲二乎上一有レ道。不レ順二乎親一、不レ信二乎朋友一矣。順二乎親一有レ道。反二諸身一不レ誠、不レ順二乎親一矣。誠レ身有レ道。不レ明二乎善一、不レ誠二乎身一矣。

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「（…に）於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに来る単語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れることをしっかりと教えたい。

2　この例文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「朋友」の送り仮名（…に）と、前に置かれた「信」の送り仮名（…られ）に表れており、「受身」を表す。「於」を英語の受動態で用いられる「by」と考えると意味を取りやすい。

3　為政者となるために上の者に信頼されるにはどうすればよいかを説いた文の一節。元の文では、「友人に信用されないならば、上の者に取り立てられることもない。」とある。

訓読と現代語訳

過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。

過失を犯したことに気づきながら、それを改めないことこそが本当の過失だ。

【出典】「論語」衛霊公

「子曰、過而不レ改、是謂レ過矣。」

指導上の注意点

1　「而」は接続詞的に用いられる置き字。この例文では置き字として扱い読んでいないが、「而して」（そして・順接）、「而るに・而も・而れども」（しかし・逆接）などと読む場合もある。読む場合は置き字とはいわない。

2　「而」は前後をつなげる接続詞。前後の文脈から順接・逆接どちらの意味も表す。「而」のもつニュアンスは、「而」の前で最後に読まれる語の送り仮名として表される。この例文では「…〈動詞の連用形〉テ」「…〈形容詞・形容動詞・助動詞の連用形〉シテ」と読まれており、順接のニュアンスを表している。

3　「矣」は文末に用いられる置き字。書き手の強く言い切る気持ち（断定の語気）を表す。

4　誰でも過ちを犯す。それを改めないのがいけない、と説く。過ちを合理化してしまう現象は古今東西よく見られる。

訓読と現代語訳

心焉に在らざれば、視れども見えず。

目の前のことに集中できなければ、いくら見ても目に入ってこない。

【出典】「大学」伝七章

心不レ在レ焉、視而不レ見、聴而不レ聞、食而不レ知二其味一。

指導上の注意点

1　「而」は接続詞的に用いられる置き字。この例文では置き字として扱い読んでいないが、「而して」（そして・順接）、「而るに・而も・而れども」（しかし・逆接）などと読む場合もある。読む場合は置き字とはいわない。

2　「而」は前後をつなげる接続詞。前後の文脈から順接・逆接どちらの意味も表す。「而」のもつニュアンスは、「而」の前で最後に読まれる語の送り仮名として表される。この例文では「…〈連体形〉モ」「…〈已然形〉ドモ」と読まれており、逆接のニュアンスを表している。

3　「焉」は文末に置かれた場合は断定の語気を表す置き字と判断して読まれないことが多いが、ここでは存在を表す動詞「在」の補語として「ここ」と読まれている。

4　「助動詞『ず』の已然形＋ば」を仮定条件〈…ならば〉として解釈しているが、古文で学んでいる文語文法だと確定条件〈…ので〉と訳すため、違和感を抱く生徒もいるだろう。漢文訓読には上代から近世まで、さまざまな時代の文法が残っているため、「已然形＋ば」を仮定条件・確定条件のどちらで解釈することもありうる、というのは生徒と共有したい。文語文法における已然形は、口語文法では仮定形となっていることも、合わせて確認しておきたい。

5　上の空では見ても見えない、つまり何事も心が正しくなければ、正しい判断や行動ができない、ということを言ったもの。

「視」は「みようとしてみる」の意味で、「見」は「みえる」の意味。英語の「watch」と「see」と考えるとよい。

訓読と現代語訳

三人行（さんにんおこなへ）ば、必（かなら）ず我（わ）が師（し）有（あ）り。

何人かで行動すると、必ずその中に自分の師とすべき人がいる。

指導上の注意点

【出典】「論語」述而
子曰（ハク）、「三人行（ヘバ）、必有（アリ）二我師一焉。択（エラビテ）二其善者一而従（ヒテ）レ之（ニ）、其不善者（ノ）一而改（アラタムル）レ之（ヲ）。」

1　文末に用いられる置き字の文例。「焉」は断定の語気を表す置き字として扱い、読んでいない。また、そのニュアンスを表す送り仮名を前後に送ることも難しく、訳出もしにくい。

2　「焉」は前の例文で「ここ」という代名詞の読み方が示されている。他にも理由を尋ねる疑問詞として「いづクンゾ」と読む場合もあり、このあとの再読文字の例文で登場する。

3　「三人」は文字通り「三人」とする解釈もあるが、「三」は多数の意味を表すことが多いので、「何人も」と解釈した。

4　何人かで行動すると、かならずその中には自分の師とすべき人物がいる、という意味。「行」は「行けば」と読んで「連れ立っていけば」とするものもある。

▼再読文字　再読文字の指導でまず注意すべきことは、再読という現象は、訓読するにあたって生じてきた便宜的な技術なのであって、もともとの漢字自体になにか特別な意味や機能があるわけではないのだという点である。「日本語の副詞と助動詞の意味を兼ね備えた文字」という説明がなされることが多いが、これもその漢字に他と区別される複雑な意味合いがあるかのごとき印象を与えかねないので、賛成し難い。再読ということは、あくまでその字の字義をできるだけ正確に汲み尽くそうとして、訓読の技術上結果的に起こってきたことなのであって、もとの漢字自体に特別の意味合いがあって起こったことではないのである。

　ではなぜ特定の文字についてだけ再読法が固定したのかというと、これらの文字にはいずれも意味のきわめて接近した文字があるので、それらとの区別を明確にする必要があったということが一つある。例えば、「将」（まさニ…（ント）す）は事柄のうえで「…しかかる」というニュアンスの語だが、これは

「欲」（…ントほっス）が、もともとは心のうえで「…しようと思い立つ」とあるのとを区別しようとして再読し、「如」が状態や外見の類似をいうのに対して、「猶」は理屈のうえでの類似をいうので再読して区別する――といったような具合である。「不」に対する「未」、「当」「宜」「須」相互の関係などの例も同様である。

また、「当応」（当ニ…応シ）や「猶如」（猶ホ…如シ）のような連用の語法があり、これらの一字一字を落とさず訓読しようとすることから習慣化して、「当」「猶」一字だけの場合も再読することになったとする説もある。

訓読と現代語訳

未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らんや。

まだ生も分からないのに、どうして死が分かるだろうか（いや分からない）。

【出典】「論語」先進
「曰、敢テ問フ死。曰、未ダ知ラ生、焉ンゾ知ラン死。」

指導上の注意点

1　再読文字として最もよく見かける「未」を使った形。再読文字という言い方は、返読文字と同じように日本人が訓読する上で気をつけるべき文字をまとめて名付けた名称であり、再読文字、という文字が元から存在したわけではない。訓読の過程で二度読まないと意味が取りにくい文字をまとめて再読文字と呼んでいるにすぎず、中国語では一度しか読まない。

2　再読文字の「いまダ…ず」などという読みは決まった読みなので、P一二三の下段の表を用いて他の再読文字の読みと一緒に覚えておくとよい。また、読みを細かに見ていくと、「未」（いまダ…ず）の二度目の読みは打消の助動詞「ず」なので、その直前の用言は未然形で読む必要がある。漢文を読むことは、文語文法を身につける絶好の機会であることを意識させるとよい。

3　孔子が弟子に「死」について尋ねられて応えた言葉である。まずはしっかり生きることが大事であるという孔子の現実主義が伺える。

訓読と現代語訳

老いの将に至らんとするを知らず。

老いがやって来ることにも気がつかない。

【出典】 「論語」述而
「其為レ人也、発憤忘レ食、楽以忘レ憂、不レ知二老将一レ至云爾。」

指導上の注意点

1　再読文字「将」を用いた例文。この文字は「まさニ…す」と覚えさせることが多いが、「将至（将に至らんとす）」のように「す」の直前には「ント」が送られるため、「まさニ…（ント）す」と覚えさせるとよい。「ン」は意志を表す「む」であり、漢文では「ム」と表記せず、撥音便で「ン」と表記する。（古田島洋介『これならわかる漢文の送り仮名』新典社P一二三）

2　本例文は、再読文字「将」を読んでからさらに上に返るという構造になっているため、「レ点」が用いられている。「レ点」は、まずレ点に従ってレ点を挟んだ下の文字から上の文字に返り、次に一点に従って二点のついた文字に返る。

3　「老」は名詞なので、「老イ」と送り仮名を送らず、「老」とする場合もある。

4　文構造としては「知」の前に省略された主語があり、述語「知」の後に目的語として名詞句「老将至」が置かれている、という構造。名詞句「老将至」の構造も「主語（老）＋修飾語（将）＋述語（至）」という構造になっている。名詞句の主語には送り仮名として「ノ」を送ることが一般的だが、ここでもそのようになっている。また、名詞句は「知」の目的語なので、「まさニ…ントす」の文末が連体形で読まれ、さらに目的語に送られる送り仮名「ヲ」が送られている。

5　孔子が、自分のことを語った言葉である。「学」や「道」に熱中し、「老いが忍び寄るのも気がつかない」、それが私だと。

訓読と現代語訳

時に及んで当に勉励すべし。

なすべきときに励むべきである。

【出典】 陶潜「雑詩・其一」
「盛年不二重来一、一日難二再晨一、及レ時当二勉励一、歳月不レ待レ人。」

指導上の注意点

1　再読文字「当」を使った例文。この文字は「まさニ…ベシ」と読んで「（当然）…すべきだ・…のはずだ・…に違いない」の意。原義は「あたる」。物事の道理にぴったり当たる、ということからこのような意味になる。二度目の読み方「ベシ」は活用語尾を送るという送り仮名の原則に従って、「シ」を送る。

2　「勉励」は「勉強」と類似の語。「無理をしてつとめはげむ」意である。

3　古来、勉学すべきことを述べているものと解されているが、詩句本来の意味からいえば、人生の盛りは二度と来ないのだから、充分歓楽を尽くしておくべきだ、との意になる。

訓読と現代語訳

過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。

行き過ぎは不十分であるのとちょうど同じようなものである。

【出典】「論語」先進

「子貢問、師与レ商也孰賢。子曰、師也過、商也不レ及。曰、然則師愈歟。子曰、過猶不レ及。」

指導上の注意点

1　再読文字「猶」は「なホ…ごとシ」と読むが、似たような意味を持つ文字に「如・若」がある。「如・若」が単なる相似・同一をいうのに対して、「猶」は「実際には違うのだが、例えていえばこんなようなものだ」という意味をもち、そのニュアンスを伝えるために再読されている。訳出する際に「ちょうど」と入れるのも同じ理由からである。この例文も、「過」と「不及」とは正反対のことだが、例えていえば同じようなものだ、といっている。

2　「ごとし」に接続する場合、名詞であれば「…ノ」となり、動詞や助動詞など活用する語であれば「連体形＋ガ」となる点に注意する。「ず」の連体形は「ぬ・ざる」があるが、漢文では「ぬ・ね」の活用は用いないことも合わせて指導しておきたい。

3　ちょうどよいことの難しさをいう。及ばないことの非は分かりやすいが、過ぎることの非はなかなか理解されにくい。

訓読と現代語訳

惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。

ただ仁者だけが高い位におるべきである。

【出典】「孟子」離婁章句上

是以惟仁者宜レ在二高位一。不仁而在二高位一、是播二其悪於衆一也。

指導上の注意点

1　再読文字「宜」は「よろシク…ベシ」と訓読し、「…のがよ

い」「…すべきである」の意を表す。後に置かれた動詞が表す行為や状態に対し、道理や事情の上から判断して適切であると認定したことを示す働きをもつ。（三省堂『全訳漢辞海第四版』）「べし」は活用語の終止形に接続するが、ラ変型（在り・有り）には連体形に接続する。「ｕ段」に接続する、と教えると生徒は覚えやすい。

2　「惟」は「のみ」と呼応して、限定・断定・強調する形〈ただ…だけだ〉を作る。仁者とは仁徳を備えた人物のこと。

3　仁徳を備え、先王（過去の偉大な聖王）の道（政治）を実践できる者だけが、高い位につく（王となる）のがよい、というもの。

訓読と現代語訳

人生意を得ては須らく歓を尽くすべし。

生きていて心にかなうことがあれば喜びを極めるのがよい。

【出典】「将進酒」李白

君不レ見黄河之水天上来
奔流到レ海不二復回一
君不レ見高堂明鏡悲二白髪一
朝如二青絲一暮成レ雪
人生得レ意須レ尽レ歓
莫レ使二金樽空対レ月
天生二我材一必有レ用
千金散尽還来
烹レ羊宰レ牛且為レ楽
曽須二一飲三百杯一

指導上の注意点

1　再読文字「須」は「すべからク…ベシ」と訓読し、「ぜひとも…する必要がある」という意味を表す。「すべからく」はもともと「すべくあらくは」（サ変動詞の終止形「す」＋推量の助動詞「べし」の未然形＋動詞「あり」の未然形＋体言化の働きを持つ準体助詞「く」）の形。時代が下り、「すべからくは」「すべくあらく」「すべからく」と変化をした。（江連隆『漢文語法ハンドブック』大修館書店Ｐ一九九）「須」の意味は「必須」という熟語を思い浮かべるとわかりやすい。「必須科目」は「必須習得科目（必ず須く習得すべき科目）」のこと。

2　「得意」は思いがかなう意。対義語は失意。「歓」はよろこび。同じ李白の作「春夜宴二桃李園一序」にも「為レ歓幾何（歓を為すこと幾何ぞ）」とあり、夢のようにはかない人生では楽しめ

る時間が短い、と詠んでいる。

3　過ぎゆく時間は後戻りができず、人が老いてしまうのもあっという間である。だから心にかなうことがあったならば、酒でも飲んで楽しもうではないか、という酒を愛した李白らしい詩である。

漢文の基本の構造

漢文は、語の位置関係で意味が決まる。漢文の構造は熟語の構造と基本的には同じである。

構造	例	
①**主語**＋**述語** 何が　どうする	鳥 語(リ)　花 香(ル) 大 器(ハ)　晩 成(ス)	日本語と同じ語順。
②**修飾語**＋**被修飾語** どのような(に)　何だ(どうする)	天 下(ノ)　英 才	日本語と同じ語順。
③**主語**＋**述語**＋**目的語** 何が　どうする　何を	仁 者(ハ)　愛(スレ)人(ヲ)	目的語は述語の下にくる。
④**主語**＋**述語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何に(と・より)	良 薬(ハ)　苦(シ)二(ニ)於 口一(ニ)	補語は述語の下にくる。補語の上に助字がくることが多い。
⑤**主語**＋**述語**＋**目的語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何を　何に	夫 差 敗(ル)二越(ヲ)于 夫 椒一(ニ)	「述語＋目的語＋補語」の順の形。用例の多い構造。
⑥**主語**＋**述語**＋**補語**＋**目的語** 何が　どうする　何に　何を	(曹)操 遺(おくル)二(孫)権(ニ)書(ヲ)一	⑤で、述語が授与動詞などのときは、目的語と補語の順が逆になり、通常は置き字を用いない。
⑦**主語**＋**述語**＋**補語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何に　何に 第二補語	(臣)見(ユ)二将 軍(ニ)於 此一(ニ)	二つめの補語は場所を示す場合が多い。